Ⅰ　自立に向かう子どもたち

ー自立につながる自己決定をー

副校長　井　﨑　　明

1　はじめに

本校では，長年にわたって，子どもが自ら考え，自ら判断し，行動できる資質や能力，つまり，自己教育力を育むことをめざして研究と実践をを重ねてきている。

特に，教科の授業において，

> 子どもが問題を発見し ー 追究のめあてをもち ー 自分なりの解決方法を模索し ー
> じっくり課題解決に取り組み ー 表現し ー 振り返る

という課題解決の道筋を，子どもの切実な願いから生まれる歩みとして，言い換えれば自己実現の過程として歩むことができるよう，支援のあり方を考えてきた。たとえば，学校外の人や自然や社会に直接触れて体感すること，様々な体験活動の中から体で感じ取って学ぶこと，表現を通して学びを深めることなど，具体的な体験や活動を通した学習は，これまで一貫して重視されてきている。基礎的な知識や技能を身に付けさせることは重要なことであるが，それ以上に，「知識・技能を獲得するプロセスを学ぶこと」の重要性を意識してきたからである。

研究主題「自立に向かう子どもたち」は，平成８年度から継続して掲げている。「自立」という主題はあまりに広くまた抽象的であるかもしれないが，当然，それ以前の研究と連続性がある。これまで授業研究で課題にしてきた学習のあり方は，授業の中だけの問題ではない。子どもの暮らしの全体に視野を広げ，学習の力とそれを支える豊かな人間性をトータルなものとしてとらえる必要が生まれてきた。子どもの生活における体験や感性がもとになって学習が成り立つものだが，さらに，学習で身に付けた資質や能力が子どもの「生きる力」となって初めて意味を持つ。これからの子どもは学校週５日制，生涯学習の時代に生きることを考えれば，暮らし全体を通じて子どもにどんな力をつけていくべきか，広い視野からもう一度検討し整理してみた。基本的な生活習慣を始め，人とのかかわり，表現力など，様々な要素をも視野に入れ，私たちのめざす子ども像を，自立に向かって歩み続ける子どもの姿である，自立に向かう子どもたちであると考えるに至っている。

2　自分で決める場を大切にする

本校では「自立に向かう子ども」を「他とのかかわりの中で，自ら考え，判断し，行動できる子ども」と言い表している。学習における自己教育力という面に加えて，自分らしい生き方を求めて「自分さがしの旅」を歩む面をも含んでいる。

したがって一つには，学習指導について，子どもの主体的な学びと振り返りという観点に立って学習過程の構造を見直し，教師としての支援のあり方を見直す研究が必要である。またもう一つには，学校生活全体を通じて，「子どもたちが興味・関心のあることにじっくり取り組めるゆとり」があり「存在感と自己実現の喜びを味わうことができる」ような生活づくりの研究が必要である。そのために，自然と触れあう体験，友達と触れあう体験，異年令集団の体験，社会的な役割やルー

ルの体験など，なまの直接的な体験を重視する必要がある。本校の研究は，そのように学校生活全般の見直しまで課題に含むようになった。

「自立に向かう」を求める上で重視しているのが「自分で決める」ことである。

自立とはつまるところ，自分の行動を自分の責任で決定すること，つまり行動が自己決定に基づいていることだと言うこともできる。しかし「自分で決める」ことが我々の考える自立につながるものになるためには，いろいろな条件がある。

○　自己決定は「自分だけで決定する」ことではない。他と十分かかわりをもち，相互に影響しあいながら，しかも，自分の責任において，自分で決めて行動することである。他とかかわりを持たずに決めることは，孤立や自分勝手につながる。大切なのは「他人の力を借りながら自分を生み出す」（佐藤学）ことである。

○　自己決定の背後には，自分自身に対する理解があり，自分にふさわしい目標，自分にあった方法の自己決定が伴っていなければならない。

○　自己決定の根拠として，過去の自己決定が自分に何をもたらしたかについての自己評価と反省がなければならない。根拠をもった責任の持てる自己決定であれば，結果についての責任も自分で引き受けることができる。自分の行動が自己決定と自己評価によって裏打ちされていることで，自分への理解や信頼が深まっていく。

自己決定が自己評価につながり，自己評価が次の自己決定の根拠になるようなサイクルが成り立っていること，そして一方では，他とのかかわり，分かち合い，恵み合いが成り立っていること，この縦横のつながりが重要である。

このことを授業の視点として見直すと次のことが大切になる。

○　追究するめあて（問題）が子どもの内面から発したものになっているか。

○　めあて追究の過程に，「気づく・感じる」→「考える・創造する」→「表現する・実践する」→「振り返る」のサイクルが生まれているか。

○　教師や仲間などの「人」，資料・教具などの「もの」，活動の場，選択・決定の場などの「場」とのかかわりが生まれているか。

○　授業の中に自己決定の場があり，その子らしい個性と他とのかかわりが生きた決定になっているか。それが，内発的な振り返りにつながっているか。

○　学習したことで，自分自身への新たな気づきが生まれているか。

3　教育課程の編成

「自立に向かう」観点から学校生活全般を見直しデザインすることは，毎年反省に立って修正を加えながら少しずつ進めている。今年度は，これから迎える移行期を想定して『教育課程の編成平成12年度（移行期）版』をまとめた。この中で特に，「総合的な学習」「学校行事」については，教官全員によるプロジェクトチームおよび学年チームによって，縦の関係（6年間の系統性，発展性），横の関係（年間の流れにおける適切な位置づけ，教科との関係）を交互に検討するという態勢を継続しながらまとめてきた。

教育課程の編成は，子どもの生活全般のデザインという意味があり，「自立」をめざす上で非常に重要な研究課題となるものである。今は少しずつ見直しつつある過渡期にあるが，今後も「これで完成」というものができあがるのではない。常に社会の要請，我々の願い，子どもの実態を検討しながら，結果として本校の特色のにじみ出るものにしていきたい。